

「菊」の詠みどころ

——明治期俳諧宗匠と正岡子規達の作品から——

青木亮人（同志社大学非常勤講師）

E-mail k385_haffner@yahoo.co.jp

要旨

明治時代、正岡子規は俳句革新運動を展開したとされる。しかし、その作品上における実践は従来指摘されることは少なかった。そこで子規達と、彼らが批判した「旧派」の作品双方を検証して両派の差異を抽出し、そこから子規達の革新性を検証した。題材は「菊」を詠んだ両派作品である。本稿は子規達の俳句革新運動の実態を当時の作品状況に即し、そして作品上から考察するものである。

abstract

This article compared the work of Shiki Masaoka with "the conservative method" and analyzed a haiku innovation campaign in line with a work.

はじめに

明治も三〇年を数えようとする頃、俳壇では「新派・旧派」が人々の口吻に上りはじめた。「旧派」は江戸期以来の旧弊な俳句観を有する派で、「新派」は明治の新時代にふさわしい「文学」を標榜する派と見なされ、そして「新派」の雄が正岡子規達である。

その子規は「新派・旧派」の噂を受け、次のような俳論を発表した。

問 新俳句と月並俳句とは句作に差異あるものと考へらる。果して差異あらば、新俳句は如何なる点を主眼とし、月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや。

答 新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。(略) 第一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼(月並句、引用者注)は往々智識に訴へんと欲す。(略) 第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向あり。(子規「俳句問答」、「日本新聞」明治29・7・27)

子規は「新派」新俳句／旧派月並俳句の差異を問答形式で説き進め、次

のように整理した。

新派―直接に感情に訴え、陳腐な意匠を嫌う（新奇を好む）

旧派―往々に智識に訴え、陳腐な意匠を好み、新奇を嫌う

そして、彼は両派の別を具体的に示すため、次の例句を挙げて説明するのである。

黄鳥の初音や老の耳果報 蓬宇

子規によると、これは「意匠の陳腐なる」（前掲「俳句問答」句という。それは、蓬宇句以前に類似した先行句が多々存在するためである。

この句の如き、必ずしも類句を挙げて而して後始めてその陳腐を知る者にあらずれど、念のために古人の類句を示さんに、

鶯の耳に順に今年かな 紹巴

鶯や耳これを得て今朝の春 昌察

鶯や耳の果報を数ふ年 梅室

六十の春

鶯に耳面白き今年かな 乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最も相類似せるを見る。（「俳句問答」、日本新聞「明治29・7・27」）

これらは論語の「耳順」を借りつつ、「六十の春」とは鶯声をいち早く聞きとり、風流を解する「耳」を得ることであるという趣向が共通していよう。このような「鶯」句の先例が多々存在するにも関わらず、蓬宇は「誰が聞きても陳腐なべきを（略）今更のやうに作れり」（前掲「俳句問答」）というのであり、そのため子規は「意匠の陳腐なる」と批判したのだった。

では、「新派」的な「鶯」句はどのようなものか。子規は他俳論で次の句を賞讃している。

鶯や押上町の家の梅

碧梧桐

この句は、「印象を明にしたる」（明治二十九年の俳諧「日本新聞」明治30・1・29）「新調」という。それは「押上町の家」と町名と場所を明示したために、「鶯」がどの地で鳴き、またどこで聴いたかが明瞭となり、「印象を明にしたる」効果を獲得したというのである。そして、個別の町名を詠む「鶯」句は従来さほど存在しないため、子規は碧梧桐句を「陳腐」を脱したと評したのであった。

この子規の俳論で注目すべきは、常に作品を比較分析した上で判断している点であろう。彼は作品を単独で扱うことなく、先行作品と比較した上でその価値を測定しているのである。

この子規の判断基準は、これまでさほど検討されなかったのではないか。従来は「新派〓肯定／旧派〓否定」という価値観の中で「新派」研究が発展する傾向にあり、両派を比較する視点そのものが稀薄であった¹⁾。よって、作品のどの点が「月並」で、またどのような句が「新派」的かは不明点が存在するといつてよい。

では、子規達の「新派」の特徴をどの点に求めればよいのだろうか。この時、従来参照されたのが「写生」であった。それは子規が提唱し、眼前の事物をありのままに写す句法とされ、そして子規達の「月並」打破を目標とした俳句革新運動の原動力となったと説明されることが多い。

しかし、これまでの研究は子規俳論を参照して「写生」を確認する傾向にあり、当時の作品における「月並／写生」の特徴はいまだ曖昧な点が多々存在している。これは、「月並〓陳腐／写生〓俳句革新」の内実が実際は不明であることの意味しており、ここに研究の余地があるといつてよい。

一例を挙げてみよう。たとえば、次の句群はどの点が「月並／写生」なのだろうか。

平生の心尽しや菊の花

肥料して育てし菊の葉勝なり

菊の香はまだ、しか也初時雨

枯菊に煤漏れこぼる小窓哉 (作者名略)

これらの句において、「月並／写生」の区別を見出すことは容易かもしれない。しかし、作品のどのような措辞や趣向が「月並」で、どの点が「写生」かを把握することは困難といつてよい。それは、「月並／写生」を比較した上での両者の特徴が検討されてこなかったためである。

ここで注目されるのが、新旧の別を見出した子規の判断基準である。彼は「月並／写生」の両者を比較することで、「月並＝陳腐／写生＝新奇」（前掲「俳句問答」）という結論を得ていた。よって、「月並／写生」の価値観を復元するには子規のように両者の句群そのものを比較検討することが必要となる。

ただ、彼に倣って「月並／写生」の特徴を比較する際、留意すべき点が存在する。

子規は同時代作品を評する時、「古人の類句」（前掲「俳句問答」）の多寡を基準としつつ、俳諧宗匠達の句は「類句」が多いため「陳腐」、自派の句は「類句」が少ないため「新奇」と見なした形跡がある。その判断は、彼が室町／江戸期の発句を季語・主題別に分類した作業（「分類俳句全集」と呼ばれる）の知見が基となっており、そのため「古人の類句」は長期間を経て醸成された表現類型を指す可能性が高い。よって、明治期のある句が「月並」か否かは、少なくとも江戸期以来の「類句」を踏査した上で判断する必要がある。

しかし、本稿の主旨は明治期の「類句」が江戸期以来どのような過程を経て定着したかを江戸／明治期の句群を列挙して検討することではなく、その前に確認すべき事柄を明らかにする点にある。すなわち、明治期にどのような「類句」「月並句」が存在したのか、また子規達の「写生」句が「月並句」とどの点が異質であったかを、まずは明治という同時代の中で比較検討することが目的である。それは子規の価値観を全て復元するのではなく、その第一段階として明

治期における「月並／写生」の差異を探ることにあり、その際に子規の判断方法を参考にしようというのである。

その具体的な検討例として、本稿は「菊」句における「月並／写生」のあり方を考察したい。菊は秋を代表する花で、多くの俳人達に詠まれているため、「旧派」の俳諧宗匠達と子規達との差異が明瞭に知られる句材といえよう。

本稿はこの「菊」句群の分析を通じ、明治期における「月並句」の内実と「写生」の意義を検証する試論である。

1 手間のかかる「菊」

まずは俳諧宗匠達における「菊」のあり方を見てみよう。

第一に、「菊」は手のかかる花とされた。根分けや土作り、また水の量に気を配るなどていねいに育てる必要がある、その様子は江戸期から詠まれている。それが明治期にどのように流布していたか、『発句古人五百題』（夜雪庵金羅翁校訂・竹林舎狐狗狸編述、大川屋書店、明治31・6・7）に見てみよう。

- ① けふになりてきく作ふと思ひけり 二水
② きくさいてけふ迄の世話すれけり 李園（147頁）

①は『あら野』（元禄3〔1689〕頃。後代に「芭蕉七部集」の一書と称された）所収句で、菊は手がける機会をつい見逃してしまうが、「けふになりて」人が見事に咲かせた菊を前にすると改めて後悔される、という句意である。②は、通常は加賀の千代女の句とされ、『千代尼句集』（宝暦14〔1764〕に素園名で掲載された（『発句古人五百題』が「李園」としたのは「素園」の読み誤りか）。句意は、手のかかる菊は面倒に感じることもあるが、花開く時は「けふ迄の世話すれけり」というのである。

この菊のあり方は、『発句古人五百題』と同時代の「旧派」系俳人達におい

でも同様で、それは日々心を尽くし、丹誠をこめてこそ美しい花を咲かせると詠まれた。

③作り人の心尽しや菊のはな

璞斎

〔俳諧一日集〕40編、明治25・7、東京、27頁上段

④平生の心尽しや菊の花

（無署名）

〔風雅乃栞〕23回、明治29・11、大阪、170頁1段目

⑤手を尽し心尽しや菊の花

蟻屋

〔俳諧鴨東新誌〕85号、京都、5頁上

「菊」は一朝一夕に育つ花ではない。そのため、「作り人」③は「平生」④から「手を尽し心尽し」⑤を心がけて初めて花を開かせるのである。同時に、その手間は菊作りの醍醐味でもあった。

⑥咲く迄の心使ひや菊の花

（無署名）

〔前掲「風雅乃栞」〕23回、大阪、2頁2段目

⑦咲く迄の世話たのしむや菊の主

露卓

〔俳諧新誌〕1号、明治24・11、金沢、4才下段

⑧苦は栞の種と思ひて菊作り

昶水

〔俳諧明倫雑誌〕102号、明治23・10、東京、12頁下段

菊作りは手がかかるが、その一方で「咲く迄の心使ひ」⑥が愉しみである。そのため、見事に花咲いた時を想いつつ「苦は栞の種と思ひて」⑧、「咲く迄の世話たのしむ」⑦のであった。そして、「菊」を首尾よく花を咲かせた折には育て主に賞讃が送られることとなる。

⑨氏よりも育ては菊の手入かな

堂てす

〔明治新撰俳諧二万集〕明治24・11、博文館、東京、21頁下段

⑩丹誠のこらして菊のあるし哉

柳明

〔俳諧明倫雑誌〕39号、明治17・2、東京、5頁

⑪丹誠を人に見せけり菊の主

城山

〔越路の雪〕5号、明治33・12、新潟、25頁

「菊」作りは高貴な身や素性の良い人物であれば順調に運ぶわけではなく、実際にまめまめしい世話ができるか否か⑨、あるいはいかに「丹誠」⑩をこめるか否かである。そのため、見事に色づく「菊」は「主」の「丹誠」を鑑賞者に感じさせるのであった⑪。

ところで、これらの「丹誠」こめた「手入」を愉しむ内容の「菊」句は一種の教訓と捉えられることも多く、特に①の二水句は人生訓に解される例が見られる。次に挙げるのは、『歌俳一口説教』（福田孝三、明治24・12・28）という庶民教化関連書の一節である。

今日になりて菊つくらうと思ひけり

これは二川と云人の句でありますがよく言ふたもので、（略）余所の花を見ると、さすがにうらやましく、来年は自分の庭へも根分していながら眺めるやうにしたいものだと感じの起るもので、それを今日の事業の上に見せると、一人ごとにみな有ります。

私も若い時分に少し学問をしておけば、恥のかき方も少ないのに、親の居るうちにしておけばよかつたのにと後悔すれども益なく、（略）児等よ、気が詰るの、骨が折るのと気儘心は後年の苦しみの下拵へで実の後悔先に立たずであるから、もはやこの事は遅しなどと考へず、思ひたつその日が踏出して、厘のたがひ、千里のあやまちとなるから、来年よい花を見やうと思はば春根分の時分より暑き日も越ねばなりませんから勤まよ〜（36頁）

（38頁）

二水句（『歌俳一口説教』では「二川」と誤伝）から「後悔先に立たず」を引き出し、それを「今日の事業」に照らした上で、「若い時分に少し学問」をし、厭わずに苦勞する大切さを説いている。このような理解は明治期にも流布していた形跡があり、次は俳人による二水句の解釈である。

九月重陽の日、菊の花を見て、俄に好もしく、己も来年こそ春から根分をして菊を作り、九月の重陽にはこの楽しみをせめと、思ふたのみて、後悔先に立ずと云意ながら、菊の花ばかりではなく、結果を得るは前に十分骨折を尽したる功ならざれば美拳あらはるゝ事なきを、観想せしものなり。（三森幹雄「俳諧志毅」、文学心のたね 7号〔明治29・9〕、6〜7頁）

先述の庶民教化書同様、この句解も二水句に「後悔先に立ず」を読みとるのであった。

このように、「菊」は色づかせるには手がかかるが、花開かせた時の喜びはひとしおであり、また咲かせるには一朝一夕にはならないことから「後悔先に立たず」を寓意する花としても詠まれたのである。

では、「菊」が花開いた後はどのように詠まれたのか。引き続き見てみよう。

2 こぼれる芳香、菊見物

咲き誇る「菊」は、第一にその芳香が賞讃された。

① 菊の香の庭にこぼるゝ日和かな 頼水

（『俳諧黄鳥集』17集、明治25・11、東京、3頁）

② 白菊のほひこぼるゝ月夜哉 常雄

（『俳諧明倫雑誌』21・2合併号、明治15・8、東京、23頁上段）

③ 白菊や闇を離れて香のくはり 耕雪

（前掲「俳諧新誌」1号、金沢、5才上）
其樵

④ 雫まで香の移りけりきくの花

（『俳諧芭蕉の露』1号、明治26・2、山口、19頁上段）
秋晴れの「日和」の中、「菊の香」は「庭」に「こぼるゝ」ばかり満ちており①、その芳香は日沈後も変わらない。月冴え渡る「夜」に「白菊」はいっそう輝き、「ほひこぼるゝ」風情を獲得した②。その「白菊」の香気は月の隠れた「夜」も「闇」を隔てて知られるほどで③、夜が明けて朝露が下りる頃もその薫りは衰えず、花弁からしたたる露の「雫まで」かぐわしいというのである④。①〜④句の共通点は、「菊の香」は花からこぼれるようにあふれ、「雫」に移り、あるいは「庭」に満ちるといふ趣向であろう。この「菊の香」①のあり方に影響を与えたのは、次の句と推定される。

菊の香や瓶にこぼるゝ水に迄

其角 （前掲『発句古人五百題』、明治版）

『其袋』（元禄3〔1690〕）等に収録された句であるが、正確には「菊の香や瓶より余る水に迄」である。しかし、たとえば句作入門書『発句自在』（桃支庵指直校閲・白日庵守朴編纂、聚栄堂、明治27・2・20）に「菊の香や瓶に翻るゝ水に迄」と挙げられるなど、明治期は「瓶にこぼるゝ」の句形でも人口に膾炙した可能性が高い（たとえば、先述の①②における「こぼるゝ」は誤伝した其角句の影響がうかがえる）。先に引用した①②④句は其角句に沿ったと判断可能であり、明治期「旧派」系の「菊の香」句は、誤伝も交えて流布していた其角句の影響大といえる。

そして、「菊の香」は草花の枯れる冬もなお残ると詠まれた。

⑤ 菊枯れて薫りは文に残りけり 翠雲

（『俳諧新誌』13号、明治25・11、金沢、5才下）

⑥ 菊の香はまだ、しか也初時雨

随斎

〔俳諧黄鳥集〕 19集、明治25・12、金沢、7頁

菊は枯れても「薫りは文に残り」(⑤)、「時雨」が降りこめても香気は「まだ、しか」(⑥)である。

このように香り高き菊は万人の賞するところであり、人々は菊の見物に飽かず足を向け、その香りや色つやを愉しむのであった。次にあげるのは「菊」見物の模様を詠んだ句である。

⑦ 見に来よと端書便りや菊の花

人木

〔鴨東新誌〕 86号、明治25・12、京都、12才上段

⑧ 菊咲て客のなき日のなかり鼻

紫雲

〔俳諧芭蕉の露〕 1号、明治26・1、山口、21頁上段

⑨ 菊咲いて名札見らるゝ戸口かな

杉風

〔前掲「俳諧新誌」 1号、金沢、7才下段

⑩ 残菊の客や袴の居り皺

春斎

〔俳諧翁の友〕 56回、明治25・11、千葉、?才

丹誠こめた「菊」が大輪を咲かせた折には、友人に「見に来よと端書便り」(⑦)をし、そして家には「客のなき日」(⑧)がないほど人々が訪れ、なかには「菊をこのように美しく咲かせるのは一体どのような人物か」と「戸口」の表札を「見らるゝ」(⑨)こともあろう。客は冬にさしかかっても絶えることはない。「残菊」を見物に訪れた客は、「袴の居り皺」(⑩)が目立つほど端座しているのであった。そして、「菊」の中でも特に賞翫されたのが「白菊」であり、純白を惜しまない白菊は秋の玉花として詠まれた。

⑪ 菊色く白きに優る色はなし

かとり

〔俳諧明倫雑誌〕 137号、明治25・10、東京、16頁下段

⑫ 白菊に秋のけしきをまとめけり

紅雪

〔俳諧豊川集〕 2編、明治23・11、新潟、3才

⑬ 数多き花をしづめて菊白し

竹愛

〔前掲「俳諧新誌」 1号、金沢、6才下段

菊の中でも白菊に「優る色」はなく(⑪)、それは「秋のけしき」を代表する風情を有し(⑫)、「数多き花をしづめて」君臨する玉花なのである(⑬)。

また、白菊は俗世の塵を寄せつけず、凜とした存在としても詠まれた。

⑭ 世の塵はとゝかぬ菊の白さかな

(無署名)

〔前掲「風雅の栞」 23回、大阪、164頁3段目

⑮ 白菊や世にへつらはぬ花のつや

夫水

〔前掲「俳諧明倫雑誌」 137号、東京、16頁上段

⑯ 白菊や世にへつらはぬ花の色

翠雲

〔前掲「俳諧新誌」 13号、金沢、5才下段

その純白に「世の塵はとゝかぬ」(⑭)というのであり、「世にへつらはぬ」(⑮)「花の色」(⑯)と賞されたのである。

①〜⑯をまとめると、「菊」は手はかかるが花開いた時には芳香があふれ、特に「白菊」は俗世から超然とした白色を輝かせる花として詠まれたといえよう。

そして、これらの他にも「菊」は多様な状況とともに詠まれていた。それは「菊」を愛でる人物のあり方に始まり、咲くべき場所や環境に加えて長寿への祈り、あるいは皇室を寿ぐ花としても詠まれており、「菊」が象徴するものは多岐に渡っているのである。その実際を次節で検討してみよう。

3 「菊」が象徴するもの

「菊」を愛する人物の境遇、またその住処はどのように詠まれたのであろうか。次はその例句である。

- ① 世の秋の外の庵や菊の花
魯堂
(前掲「柳桜吟集」6集、京都、13才)
- ② 世の塵を離れし庵や菊のはな
純栄
(前掲「俳諧新誌」1号、金沢、7才下)
- ③ 塵の世をのけた庵や菊薫る
花村
(「俳諧翁の友」23回、明治22・10、千葉、5頁)
- ④ 捨てし世に残りし世話や菊の花
松樹
(「俳諧鴨川集」2号、明治27・10、京都、10頁)
- ⑤ 世を捨て世にめでらるや菊の主
花川
(「清風草紙」25号、明治32・9、福岡、14頁上段)
- ⑥ 隠れ家も香は隠れなし菊の庵
義雄
(前掲「俳諧明倫雑誌」137号、東京、16頁上段)
- ⑦ 隠逸の徳は香にあり菊の花
北人
(前掲「明治新撰俳諧一万集」、東京、156頁下段)

まず、「菊」は「世の秋の外」(①)の「庵」(①②③⑥)に咲くのがふさわしいという。なぜなら、主は「世を捨て」(④⑤)、「世の塵を離れし」(②③)ことを願う人物であり、そのため「庵」は「隠れ家」(⑥)に他ならない。「菊」を賞翫する人物は、俗世を避ける「隠逸」(⑦)の士なのである。

ここには漢詩文以来の面影が影響しているよう。それは陶淵明が「採菊東籬下、悠然見南山」(「飲酒詩」)や「三径荒に就けども、松菊猶存す」(「帰去来」と詠んだ「菊」隠者の象徴)であり、あるいは宋代の周敦頤が「菊ハ花ノ隠逸ナル者ナリ」(『古文真宝集校本後集』[明治15・11・10、東京、山中孝之助]所

取「愛蓮説」と賞した「隠君子」としての「菊」である。よって、「世の塵」(②)を逃れ、隠者が愛する「菊」は主同様に凜とした姿を見せ、かつ清廉の気を生じる花と詠まれたのだった。

- ⑧ 白菊や庵の主は掃除好
湖水
(前掲「清風草紙」25号、福岡、13頁上段)
 - ⑨ 菊咲や下女も手まめに朝掃除
一可
(「俳諧明倫雑誌」155号、明治27・12、東京、25頁)
 - ⑩ 菊の香やつまみて捨る膝の塵
丘鳥
(「俳諧芭蕉の露」1号、山口、19頁上段)
- 「菊」は「塵」を厭う花である。そのため「庵の主」が「掃除好」(⑧)は無論のこと、「下女も手まめに朝掃除」(⑨)を怠つてはならず、端座して賞翫する際にも「膝の塵」を「つまみて捨る」(⑩)べきであろう。
- また、「菊」は古来より重陽の節供に欠かせない花であり、特に菊酒や菊の露は長寿に通じるとされた。漢詩文の「登高」(山や丘に登り、菊酒を飲む)や謡曲「菊(枕) 慈童」など、菊と長寿を謳う文学は枚挙に暇がない。明治期の俳誌等においても、「菊酒」は多々詠まれている。

- ⑪ 百年もいきる心地や菊の酒
一兎
(「清風草紙」26号、明治32・11、福岡、25頁下段)
 - ⑫ きく酒に酔うて出にけり菊の主
招鷺
(前掲「俳諧翁の友」23回、千葉、2頁)
- 「菊の酒」は「百年もいきる心地」(⑪)がし、時には「酔うて」(⑫)浮かれることもあるのである。
- そして、明治期において「菊」は皇室の象徴であった。次に明治の御代を寿ぐ句を見てみよう。

⑬ 君が代や朝日に匂ふ菊の花 (無署名)

(前掲「風雅の栞」23回、大阪、164頁3段目)

⑭ しら菊や薫りも流石皇国ぶり 逸清

(「俳諧翁の友」33回、明治23・9、千葉、18ウ)

⑮ 海こへて輝き渡る倭菊 (無署名)

(前掲「風雅の栞」23回、大阪、8頁2段目)

本居宣長の歌(敷島の和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花)をなぞりつつ、「君が代」の心とは「朝日に匂ふ菊の花」(⑬)であり、あるいは「しら菊」の「薫り」(⑭)は皇国の名にふさわしい気高さであった。そして、それは「海こへて輝き渡る」(⑮)にふさわしい大日本帝国の姿なのである。

このように「菊」には多様な故事や由来が附随し、それは「菊」を詠む際に色濃く反映しており、また文明開化を経た皇室の象徴として詠まれたのであった。

以上が俳諧宗匠達の俳書・俳誌等における「菊」句の諸相である。特徴としては措辞、趣向ともに一定の類型に沿って詠まれる傾向が強いことが挙げられるだろう。すなわち、安定した美感や風流と感じられる世界、そして定番の取り合わせや措辞を前提として、それを乱さず詠むことを目的とした作品が多数なのである。

無論、このような「菊」句の類型が江戸期以来どのように形成されたかはより詳細な踏査が必要であるが、本論の関心は宗匠達と子規達の「菊」句の差異それ自体の検討にあるため、さしあたって明治期における「菊」句の類型の確認に留めたい。

では、子規達は「菊」句をどのように詠んだのであろうか。

4 子規達の「菊」

彼らの「菊」句は、「月並」句と様相が異なっている。無論、それは全作品に該当するわけではない。

白菊に及ぶものなき月夜かな

叟柳

(「日本人」30号、明治29・11、52頁)

このような趣向は、先述の句(Ⅱ②)と大同小異といえよう。同時に、子規達は「旧派」にほぼ存在しない作品も多々詠んでいる。たとえば、彼らは次のように「菊」を育てるのだった。

① かりそめに植ゑたる菊は白かりし

牛伴

(「新俳句」〔子規閱、明治31・3、民友社〕「菊」項)

② 肥料して育てし菊の葉勝なり

虚子

(「青年文」4・4、明治29・11、31頁)

「丹誠」(Ⅰ⑩)をこめ、「心尽くし」(Ⅰ③)に育てるべき「菊」を、牛伴は「かりそめに植ゑ」たところ偶然にも「白かりし」(①)というのであり、かたや虚子は「肥料」を加えて「育てし」ために見事な花を咲かせると思いきや、「葉勝」(②)になったというのである。

また子規達は、「世を捨て」(Ⅲ⑤)て「隠逸の徳」(Ⅲ⑦)を涵養し、菊を愛する隠者の姿を次のように詠んだ。

③ 菊咲くや市井の隠者髭一寸

狙醉

(前掲「新俳句」「菊」項)

④ 菊の主問へば銭なき詩人かな

貫襄

(「車百合」2号、明治32・11、92頁)

⑤ 菊咲かず主人世を憂ふこと多し

左右衛門

(前掲『新俳句』「菊」項)

「市井」に住む者が菊を咲かせたが、主といえは「髭一寸」程度で、「隠者」の姿というより無精髭に近い。その中途半端さは「市井」で「隠者」を気取る者に似つかわしい、と興じた(③)。また、「世の塵を離れし」(Ⅲ②)「菊の主」とは聞こえがよいが、実際は「銭なき詩人」(④)に過ぎず、あるいは咲かせるべき菊が「咲かず」、そのため「世を憂うこと多し」(⑤)と杞憂を重ねるのである。

このように、子規達には「菊」を育てる喜びや育て主の「隠逸の徳」を単純に詠んだ句は稀であり、むしろ順調に育たない、あるいは花が咲かないという内容が多い。これらは「月並」句群に見られない特徴である。

また、子規達の菊は縁日に売り出されることもあった。

⑥ 縁日へ押し出す菊の車かな

子規

(「日本新聞」明治26・11・3)

⑦ 縁日に菊荅がちに埃したり

虚子

(子規「文学」、「日本人」31号、明治29・11)

菊を積んだ「車」を「縁日へ押し出す」(⑥)情景、「荅がち」の菊が「埃」(⑦)にまみれているのを発見する感覚……これらは「旧派」に見当たらない「菊」の風景といってよい。そして、子規達は菊酒においても「旧派」と異なる詠みぶりであった。

⑧ 行き過ぐる村や酒売る畑の菊

碧梧桐

(前掲「車百合」2号、96頁)

秋の時節、菊酒を売るであろう村を「行き過ぐる」(⑧)のであり、長寿に

つながる菊酒を飲もうとしないのである。「旧派」であれば菊酒はめでたいものと詠むところを、碧梧桐句は口に付けずにただ「行き過ぐる」のであった。

また、「旧派」は菊の香気は冬もかぐわしいと詠む傾向があったが(Ⅱ⑤⑥)、子規達の菊は単に枯れてしまう場合が多い。

⑨ しぐるゝや白菊残る背戸の畑

叟柳

(「日本新聞」明治28・12・10)

⑩ 白菊の落葉かぶつて枯れてゐる

非無

(前掲「青年文」4・5、27頁)

⑪ 枯菊に煤漏れこぼる小窓哉

子規

(「国民之友」165号、明治31・1、65頁)

⑫ 土凍て、鉢植の菊枯れ果つる

碧梧桐

(「めさまし草」11号、明治29・11、45頁)

冬の時雨が降り、「背戸の畑」(⑨)の草花が枯れる中で抜かれもせずに朽ちゆく「白菊」を傍観する叟柳句。非無句においては、「白菊」が落葉を被つて「枯れてゐる」(⑩)。子規句の「枯菊」は「煤漏れこぼる」(⑪)ために汚れており、碧梧桐句においては手をかけた菊が「鉢植」の中で「枯れ果つる」(⑫)まま放置されていた。

無論、「旧派」にも枯菊の朽ちた情景を詠んだ句は存在する。

菊かれて鶴にふまるゝ畠かな

真海

(前掲「俳諧翁の友」56回、6才)

「畠」の枯菊が「鶴にふまるゝ」情景は、子規達と共通するように感じられよう。しかし、気品あふれる「鶴」と菊の取り合わせは優雅な情景に解することも可能であり、「煤漏れこぼる」(⑪)枯菊を傍観する子規達とは措辞の選択に対する認識が異なるといえる。

このような両派の差異は、野菊を詠む場合にも顕著であった。まずは「旧派」句を見てみよう。

をられたる儘に花さく野菊かな

雅城

〔俳諧黄鳥集〕15集、明治25・8、7頁

寝つきつ気儘に育つ野菊哉

竹良

〔俳諧矯風雜誌〕27号、明治24・9、16頁

手入れされた菊と異なり、「をられたる儘」「気儘に育つ」のが野菊であり、そこに繕いのない魅力があるというのである。では、子規達の野菊はどうだろうか。

⑬ 倒れ伏す芒の下の野菊かな

楓水

〔ほととぎす〕212、明治31・11、59頁

⑭ 野菊茎ねぢけ葉うら枯れて花細し

虚子

〔子規「文学」、日本人〕31号、明治29・11

「旧派」ならば「寝つきつ気儘に育つ」と詠むところを、「倒れ伏す芒の下」と具体的な場所を明示し(⑬)、あるいは茎から葉裏、花の状態までを克明に記して貧相な野菊のありようを描写するのである(⑭)。一例のみ挙げたが、特に虚子句のように否定的な措辞(「ねぢけ・葉うら枯れて・細し」)は「旧派」に見当たらず、「新派」に顕著な特徴といえよう。

以上が子規達の「菊」句であるが、彼らは「旧派」のように菊作りに励むことはなく、また手のかかる菊作りから教訓を導く句を詠まなかった。その芳香や白色の輝かしさを賞することもなく、彼らは菊の主の貧相さや縁日で埃をかぶる菊を詠み、あるいは煤で汚れ、鉢植で枯れ果て、茎の捻れた野菊を詠んだのである。

おわりに

このように、子規達の「菊」句は「旧派」と全く異質であったが、それはなぜであろうか。これを検討する際、注目されるのが「写生」である。

はじめの程は空想ならでは作り得ぬを常とす。やがて実景を写さんとするにつかまえ処なき心地して、何事も句にならず、度々経験の上写実も少し出来得るに至れば、写実ほど面白く作り易きはなかるべし。空想の陳腐を悟り、写実の斬新を悟るまたこの時にあり。(子規「俳諧大要」、『日本新聞』明治28・12・8)

子規は「空想」で詠む句を「陳腐」とし、また「写実」句を「斬新」と述べた。これに本稿冒頭で扱った「俳句問答」を重ねてみよう。「我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向あり」(「俳句問答」)。すなわち、「彼旧派」は「空想」陳腐」で、「我新派」は「写実・写生」斬新・新奇」となる。

整理すると、「旧派」が「空想の陳腐」に陥るのは「写実」に抛らずに類型に沿った「月並句」を詠み続けたため、となる。かたや「新派」が「斬新」なのは、「空想の陳腐を悟り、写実の斬新を悟る」に至ったためとなろう。つまり、「旧派」新派」の境目は作品が「写生」か否かである。

実際に、先行研究では「写生」こそ「空想の陳腐」月並句」に存在しない「斬新」さをもたらした、と説明されることが多い⁴⁾。しかし、実景を描写する「写生」と、「月並句」を打破する「斬新」さが常に一致するとは限らないのではないか。ありのままの事物を「写生」しても、その表現がすでに類型として詠まれていた場合も存在するためである。

ここで注目されるのが、子規の「空想の陳腐を悟り、写実の斬新を悟る」(「俳諧大要」という一節である。彼が問題としたのは事物をありのままに捉えるか否かではなく、作品が「陳腐」か否かではなかったか。すなわち、子規は実

景を忠実に反映させることを「写実」写生の第一義としたのではなく、「斬新」な句を生む可能性が高いため「写生」を推奨した、と解釈すべきであろう。「写生」の要点は事物をありのままに把握すること自体ではなく、「空想の陳腐」月並句」に陥らないような現実の事物を発見することなのである。

ここで子規達の「菊」句を検討すると、それが「旧派」と異なる菊の姿であったのは偶然でなく、むしろ意図的に詠んだ可能性が高いといえるのではないか。無論、子規達にこのような証言は存在しない。しかし、論上で「旧派」批判を展開した彼らが、菊の実景を単に「写生」した作品を発表するであろうか。すなわち、子規達は漫然と「写生」したわけではなく、「月並句」にまだ詠まれない菊の姿を意識的に注視した結果、反「月並句」としての菊の姿を発見したのであり、そしてその姿を忠実に示す方法が「写生」だったのである。

そして、このように子規達の「菊」句を捉えた時、彼らの句の特徴がより鮮明になるのではないか。

肥料して育てし菊の葉勝なり 虚子 (IV②)
 行き過ぐる村や酒売る畑の菊 碧梧桐 (IV⑧)
 枯菊に煤漏れこぼる小窓哉 子規 (IV⑩)

「肥料して育てし」菊は、行く末には「平生の心尽しや菊の花」(II④)、または「丹誠のこらして菊のあるし哉」(II⑩)と誉められる花となるはずが、「葉勝」になつてしまったという虚子句。そして、「百年もいきる心地や」(III⑪)と賞讃される菊酒が売られている村を、立ち寄らずに通り返した碧梧桐句。あるいは、枯れても「薫りは文に残り」(II⑤)、時雨にも「菊の香はまだ、しか也」(II⑥)と讃えられるべき枯菊に、「煤漏れこぼる」現実を発見する子規句……彼らの句は、いずれも「月並句」における定番の「落ち」を裏切る趣向となつている。当時、「月並句」に慣れた読者であれば、美しい菊花から主人の日頃の丹誠を思いやり、あるいは枯れても残る菊の香気を想像しながら子規達の「菊」句を読んだであろう。しかし、句はその予想を句わせつつも素通りし、

何の「落ち」もないまま終わるのである。
 この点において、子規達の「菊」句には俳諧的な滑稽味が存在したといえるのではないか。

和歌・漢詩、あるいは小説や演劇、これらが文芸としての意味をみずからに問いかけることは極めてまれだろう。それにひきかえ俳諧は、俳諧とはなにか、という自問自答を繰り返さねばならない文芸であった。俳諧の歴史は、俳諧性や俳意というものを、自己確認しつづける宿命にあった。(藤田真一「書評 田中道雄著『蕉風復興運動と蕪村』」、『国語と国文学』平成14・9)

俳諧は和歌や連歌等の規範となるべき価値観との差異において、自らの独自性を主張した文学ジャンルといえる。従来、類型や美感を認め、受け入れつつ、そこからはみ出る現実の情景を併せて詠むことで、両者のずれや現実の過度の即物性に滑稽味を看取させることが「俳諧性」のあり方であった。

この点からすると、子規達の「菊」句も「俳諧性」を狙った作品といえるのではないか。単なる自然描写の「写生」に見える句が、実際は「月並句」を踏まえつつ、そこからはみ出る現実の姿を——「葉勝」「行き過ぐる村」「煤漏れこぼる」といった——裁ち入れてその価値観を揺さぶる句作であり、しかもその「菊」の姿は奇妙なありさまであった。一定の美感と安定した先入観に支えられた「月並句」からすると、肥料を与えた菊が「葉勝」に育つたり、また枯菊に「煤漏れこぼる」ありさまは何とも奇異な姿であつたろう。しかし、「空想」(前掲「俳諧大要」)では発見しえない現実の過剰なありようを詠もうとした子規達の句に「俳諧性」を見出すのは、的外れではあるまい。

従来、「月並句」はさほど評価されず、子規達の「写生」句が賞讃される傾向にあつた。また、その際には子規の俳論が参照されることが多く、そして「写生」は実景を描写したりリズムと定義されがちである。しかし、子規達は論者であると同時に実作者であり、その彼らが「旧派」を批判したとすれば、実

際の作品でどのように展開したかを検証しなければなるまい。同時に、「写生」句の特徴を把握するには「月並／写生」句双方を比較する必要があるだろう。

このように子規達の「写生」を捉えた際、それは「月並句」から脱すること
が第一義で、現実の忠実な描写それ自身が目的でないことが知られるのであ
り、加えて「月並句」を踏まえて「写生」句を捉えようと、「俳諧性」と称すべ
き滑稽味も存在するのであった。

俳句における「写生」の意義は、子規達及び「旧派」との差異において、そ
して彼らの作品の差異において見出されるべきであろう。「菊」句は一例であ
るが、それは明治期俳句における「写生」のあり方を今に伝えてはいないであ
ろうか。

〔注釈〕

(1) 「新派＝肯定／旧派＝否定」は個々の先行研究というより、研究全体に底流する価値観といえる。これを肯定するにせよ、否定するにせよ、従来は新旧派を比較する視点が稀薄であったため、その結論に至るまでの具体的な論証がなされなかった傾向にある。特に作品面での検討が稀薄であり、今後の研究に期待したい。

(2) 「庶民教化」とは、江戸期俳人における俳諧活動と教化運動が連動していたことを分析した飯倉洋一氏「常磐潭北論序説―俳人の庶民教化―」（『江戸時代文学誌』8号、平成3・12）において使用された表現である。

(3) 明治期の「月並句」形成に影響を与えたものに類題句集の存在が想定される。類題句集は江戸後期から明治初期にかけて膨大に刊行されており、内容は元禄期の蕉門等の故人句から現存俳人の句までを収録したものが多く、明治期の「月並句」は、たとえば「芭蕉七部集」等の俳書から直接影響を受けたというより、この類題句集から強い影響を受けた可能性が高いが、類題句集の研究は進展しているとは言いがたく、そのため「月並句」との関連も不明点が多い。今後の研究に待ちたい。

(4) 「写生」が「月並句」に存在しない「斬新」さをもたらしたという価値観は先行研究に共通するが、なぜ実景を描写することが「月並句」と異質の「斬新」さをもたらすのかを具体的に指摘した論考は見当たらない。今後の研究に期待したい。